

堺旧港周辺における新たな都市景観の創出に向けた一考察

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程

山田実穂（下村・阿久井ゼミ）

1. 研究目的 堺旧港は、中世時代の国際的な自治都市・堺を支える重要な港湾施設であったが、現在、港とその周辺地域では、埋立地や高速道路の高架が敷設され、かつての歴史的景観が損なわれてきている。本研究では、堺旧港周辺における歴史的側面と景観的側面との関連性を探ることによって、今後の新たな都市景観の創出のあり方を考察した。

2. 研究方法 まず、堺旧港および堺旧港と結びつきの強い旧環濠地域に関する資料・文献を収集し、堺旧港周辺の歴史的変遷を捉えた。次いで、港湾景観に影響を及ぼすと考えられる港周辺の物的環境について、都市計画図等を用いて周辺土地利用状況や建物高さを調査した。景観調査については、調査員5名による写真投影法により、2022年9月30日に実施した。その結果、18地点からの港湾景観が抽出された。これら18枚の写真画像について、景観構成要素を水面と人工物に分けて、画面構成率を算出した。さらに、画像内の水面と人工物を用いて典型的な構図をモデル化して、港湾景観特性を探った。

3. 歴史変遷からみた堺旧港の位置づけ 【堺旧港の成立と発展期】堺は、古代より陸上・海上の結節点として重要な場所であった。室町時代の1469年に遣明船が帰着したことを契機に貿易港として栄え、江戸時代には南蛮貿易や朱印船貿易の基地として全国各地から物資が集まった。当時は、特定の港は存在せず、沖で大型船から小型船へと荷揚げがなされていた。また、市街地の周囲には濠がめぐり、その環濠内では武士ではなく『会合衆』という豪商らによる自治が行われていた。【衰退期】1615年に起こった大坂夏の陣で市街地が焼けた後、徳川幕府により造られた新たな碁盤目状の町割りや環濠の位置は現在とほぼ変わっていない。この時、沿岸部に港が設けられた。1705年に大和川が付け替えられると、新川の土砂堆積により港湾機能を失くした。江戸商人・吉川俵右衛門を中心に、改修工事が半世紀以上も続き完成したカボチャ型の港は現在に受け継がれている（図1）。【2度目の繁栄期】明治時代に入ると、堺港の南に位置する大浜公園が1903年に、第五回内国勸業博覧会の第二会場として水族館や海水浴場などが建設され、日本随一のアーバンリゾートとしての賑わいを



図1 1863年の堺港および堺環濠都市の様子
（『堺市史』付図 文久改正堺大絵図より著者加筆）

見せた。【2 度目の衰退期】自然災害や第二次世界大戦の戦火に見舞われ、その繁栄の面影はなくなってしまった。戦後、1958 年より沿岸部では埋立が進み阪神工業地帯の一環をなす大規模コンビナートが建設された。こうして堺旧港周辺においても、工業港としての側面が強まった他、新たに開通した鉄道や道路により市街地から分断されてしまった。【3 度目の繁栄を目指して】近年、堺旧港では、かつての賑わいを取り戻そうと護岸工事や親水プロムナード整備が行われ、西端に移設された 1877 年築造の国史跡・旧堺燈台の対岸の工場壁には、南蛮貿易で栄えた港の様子が描かれている。2000 年に内国博覧会当時、大浜公園に設置されていた龍女神像が新設されている。

4. 現在の堺旧港周辺における景観特性 【港湾景観の特性】写真投影法による解析の結果、港湾景観は、水面と人工物の構図からⅠ～Ⅳの 4 タイプに分類された。特に、人工物が中景および近景に現れるタイプⅠは水面の割合と人工物の割合に着目すると、さらに 2 分類できた。タイプⅠは 18 枚中 13 枚が該当し、堺旧港の独特な湾状が景観の構図に影響していると推測される。中景域において帯状に人工物が現れるタイプⅠ（2 景）を加えて、堺旧港における景観は、水面を越した中景以遠に人工物（埋立地）が現れることが特徴であるといえる。またタイプⅢの 2 景は、旧堺燈台が中央に映っている。歴史的建造物と近代の都市化・工業化を示す建造物が相まって、新たな景観が生み出されていた。タイプⅣは 1 景のみで、水面は映らないもののヤシや舗装タイルにより港らしいという印象を与えていた（図 2）。以上、18 枚すべての景観写真において、水平線が望めるような自然的な海岸景観ではなく、また堤防や歴史的資源、港湾施設ではなく、埋立地の工場や倉庫、高架道路等の海を連想させないような施設が視野内に映る景となっていた。【周辺の物的特性】景観調査と周辺土地利用や建物高さから、北波止には工場や住宅、東には商業施設や複合施設の開発予定地が広がり、港湾景観に影響を与える要素は少ないことが分かった。一方、南波止の東側から西側にかけては大浜公園の緑地が立地し、移動や景観面での連携が重要となる。

5. まとめ 堺旧港においては、繁栄と衰退を繰り返してきた。今後は、引き継がれてきたカボチャ型の形状を維持しつつ、港の後背地の土地利用を図り、海の景観や港湾景観のイメージを相乗的に向上させるような施設誘導により、港と周辺地が一体となった堺の湾岸部におけるシンボリックな港湾景観の創出が期待される。









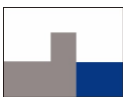



タイプ	枚数	構図パターン	例	
Ⅰ	Ⅰ-1 (水面： 40%～ 人工物： ～50%)	6 景 (①②③ ④⑨⑬)		
	Ⅰ-2 (水面： ～30% 人工物： 50%～)	7 景 (⑦⑧⑩ ⑪⑬⑭ ⑱)		
Ⅱ	2 景 (⑤⑫)			
Ⅲ	1 景 (⑮)			
	1 景 (⑰)			
Ⅳ	1 景 (⑥)			

図 2 堺旧港における港湾景観の類型図